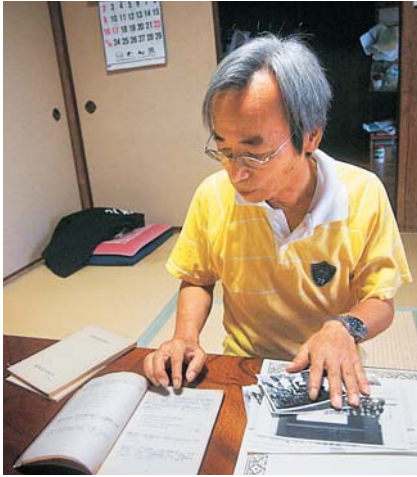


人・ひのきしん 生・記

「手話」 その①



修養科で使った「手話テキスト」を久々に読み返す佐藤さん（福山市の自宅で）

「手」で紡ぐ 言葉の世界

あの出来事から40年。これまで、実に多くの方たちと心のふれ合いを持つことができた」と柔和な表情で話すのは佐藤憲和（61歳・福芦分教会福富布教所長・広島県福山市）。

手話を始めたきっかけは、修養科に入った初日、ある教会長から「この人の世話取りをお願いしたい」と、聴覚障害のある20代の男性を紹介されたことにある。

当時、佐藤は21歳だった。

「これからよろしく」と筆談を交わした日の夜、彼は一人で詰所の外へ出ていった。心配になって後を追うと、身ぶり手ぶりで怒りをあらわにされた。「一生懸命お世話取りしようと思った矢先のこと。彼の不可解な態度に腹を立ててしまっ……」

男性とのコミュニケーションを絶った佐藤は数日後、高熱に見舞われて寝込んでしまった。これは、親神様からのメッセージでは——。すぐに彼に歩み寄った。

以来、手話の技術を身に付けようと、修養科で行われている手話の課外講習を受講。さらに詰所で毎晩、男性から手ほどきを受ける中で、程なく基本的な日常会話を手話で表現できるようになった。

相手と心が通い合うと、さまざまなことに気づかされた。初日、自分は彼に対して、表面的な同情の念から手を差し伸べようとしたのではないか。もしやその心を彼が見透かして——。他にも、いろいろと思い当たる節があった。

「初めは、お世話取りをするために学んでいたけれど、だんだんと考えが変わっていった。手話を通して、障害のある方と会話できる喜び、心がつながる喜びを感じるようになった」

地元へ戻ると、仲間と共に手話サークルを立ち上げた。38年が経った現在も、このサークルは手話の習得や聴覚障害者との交流の場として、広く市民に親しまれている。

手話の世界では、かつて「ボランティア」は「(自分の) 苦勞を差し上げる」という手振りで表現されていた。それが、いまでは「共に歩む」という手振りに変わっている。

「手振りが変わったのは、社会の受けとめ方が変わってきたからだと思う。これからも手話通訳を通して、障害のある方と共に歩み、共に成長させていただきたい」